

米軍文書にみる空襲目標としての千歳

及川 琢 英

千歳市総務部市史編さん担当
編集員

はじめに

日本本土は一九四四年十一月よりマリアナから飛来したB・29による空襲に晒された。ただし北海道は、四トン爆弾を搭載したB・29の行動半径が本州北部を北限としたため、その爆撃を逃れることとなった。しかし米軍が本土上陸作戦を実施するにあたって、その障害となる北海道残存の航空兵力を一掃する必要に迫られることとなり、太平洋側を北上した機動部隊によって、北海道は攻撃を受けた⁽¹⁾。

四五年七月十四・十五日、北海道各地は米軍艦載機による空襲および艦砲射撃を受けた。航空施設だけではなく、艦船、鉄道、市街地、工場などが被害を受けた。北海道空襲の死者は一九五八人に及び、特に被害が大きかったのは、函館⁽²⁾(五一八人)、室蘭(四八〇人)、根室(三八五人)、釧路(一九二人)であった。

千歳は道内でも有数の飛行場と発電所を有していたが大規模な空襲は受ける死者も出なかった。しかし米軍側の史料をみると、空襲目標として標的に上げられ分析されていたことがわかる。そこで本稿では、米軍文書を用いて千歳が空襲目標としてどのように扱われていたのかについて考察したい⁽³⁾。

一 米国戦略爆撃調査団文書と空襲目標

日本空襲に関する米軍側の史料として、『米国戦略爆撃調査団文書』がある。米国戦略爆撃調査団は、一九四四年十一月に設置された陸海軍合同の調査機関であり、当初、ヨーロッパ戦域の調査を行い、日本降伏後には、太平洋戦域の調査を行った。同調査団が収集した資料は、一九四七年に米国国立文書館に移管された。日本の国会図書館は、同調査団文書のうち、太平洋戦域の調査に関わる範囲を収集している。収集した文書の概要については表1のとおりである。

このうちB・29の攻撃記録である「第20・21爆撃団作戦任務報告書」(USB-05)は、本州の空襲に関する研究でよく用いられている。また「海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書」(USB-06)からは北海道空襲の詳細がわかるが、すでに松本尚志氏によって分析がなされている⁽⁴⁾。松本氏は、北海道の飛行場について分析している『航空情報摘要・本州北部および北海道』(一九四五年三月十五日付)という史料を紹介し、千歳飛行場の記載を例として挙げている。そして千歳飛行場がなぜか被害を受けなかったことを指摘した。

ただ『米国戦略爆撃調査団文書』からは、右の史料以外にも千歳に関する記載がみつかると。そこで以下では松本氏の研究を踏まえつつ、空襲目標としての千歳についてさらに分析を進めたい。

USB・01 空襲目標情報…陸海軍合同地域調査

本史料は、陸軍省参謀軍事情報部・情報部AC/AS・海軍情報部・戦略局提供の情報によって、統合情報調査出版局が刊行したものであった⁽⁵⁾。占領地や植民地を含む日本の勢力範囲の情報が地域ごとにまとめられている。

そのうち北海道に関しては、「八一 北日本 北海道」(一九四四年九月

表-1 米国戦略爆撃調査団文書

請求記号	史料名	原史料名
YD-208	最終報告書	Entry 2, Final Reports of the United States Strategic Bombing Survey, 1945-1947
	目録	Entry 5, Index
USB-01	空襲目標情報:陸海軍合同地域調査	Entry 49, Security-Classified Joint Army-Navy Intelligence Studies(JANIS), 1944-1945
USB-02	空襲目標情報:地域調査	Entry 50, Japanese Resources Reference Notebooks, 1945
USB-03	空襲・爆撃データに関する諸統計表	Entry 51, Security-Classified Statistical Reports Covering Allied and U.S. Air Forces Attack Data, 1945-1946
USB-04	陸軍航空隊統計概報	Entry 52, Security-Classified Operations Reports and Statistical Summaries of the U.S. Army Air Forces and Bomber Commands in the Pacific
USB-05	第20・21爆撃軍団作戦任務報告書 (B29攻撃記録)	Entry 53, Security-Classified Tactical Mission Reports of the 20th & 21st Bomber Commands, 1945
USB-06	海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書	Entry 55, Security-Classified Carrier-Based Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports, 1944-1945
USB-07	海軍航空隊作戦報告書	Entry 56, Security-Classified U.S. Naval Air Narrative and Statistical Operations Summaries and Reports, 1943-1945
USB-08	海軍海上戦闘報告書	Entry 57, Security-Classified Naval Surface Action Reports, June 30-Sept. 1, 1945
USB-09	第20航空軍損害評価カード	Entry 60, Security-Classified 20th Air Force Damage Assessment Cards, 1945
USB-10	各種日本関係情報	Entry 46, Security-Classified Intelligence Library, 1932-1947
USB-11	空襲目標情報:地域別及び目標別	Entry 47, Security-Classified Joint Target Group Air Target Analyses, 1944-1945
〃	空襲目標情報:地域別標的ファイル	Entry 48, Security-Classified Air Objective Folders, 1942-1944
USB-12	日本政財界・軍部指導者尋問記録	Entry 43, USSBS Transcripts of Interrogations and Interrogation Reports of Japanese Industrial, Military, and Political Leaders, 1945-1946
〃	日本航空戦力調査	Entry 44, Reports of Japanese Responses to Questionnaires Relating to Japanese Air Strength, 1945-1946
USB-13	報告書草案及び作成用資料	Entry 41, Security-Classified Pacific Survey Reports and Supporting Records 1928-1947
USB-14	海軍・海兵隊陸上機戦闘報告書	Entry 54, Security-Classified Land-Base Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports, 1944-1945
USB-15	空襲損害評価報告書	Entry 59, Security-Classified Damage Assessment Reports, 1945
USB-16	雑資料:原爆、太平洋戦域での両軍の軍事作戦、中国共産党に関する日本の報告書	No Entry Number, Miscellaneous Documents Relating to the Atomic Bombing of Japan, Allied and Japanese Military Operations in the Pacific, and Japanese Reports on Chinese Communist Party
USB-17	米国戦略爆撃調査団活動史	History of the U.S. Strategic Bombing Survey (Pacific), 1945-1946

(注)国会図書館憲政資料室所蔵『米国戦略爆撃調査団文書解説目録』より作成。

刊行)に記載されている。同書は、

第一章 概説第二章 軍事地勢

第三章 海洋

第四章 沿岸および上陸海岸

第五章 気候および天候

第六章 港湾施設

第七章 交通および通信

第八章 都市

第九章 資源および貿易

第十章 住民および政治

第十一章 衛生

第十二章 防衛

第十三章 海軍施設

第十四章 航空施設

第十五章 地名および地図

という構成となっている。

千歳に関係するのは、発電所および飛行場についての記述である。第一章において、北海道の発電所については次のように概説されている。

一九四三年末、北海道における最大発電力量は六四万キロワットであり、日本全体一三四〇万キロワットの二〇分の一とみられる。四三年の送電量は、日本本土の合計四九〇億キロワットアワーのうち、約二六億五〇〇〇万キロワットアワーと推定される。北海道の火力発電による最大発電力量一四万キロワットの九二パーセントを五つの火力発電所で占めている。乾季における予備発電力量の下限は、主にこれら五カ所で六万キロワット以下となる。北海道における送電系統は、完全に統合されていない。火力発電が一年に要する燃料は、石炭約三万五万メトリックトンである。

同書の表一・二一では、北海道の発電所として五二カ所（火力一三・水力三九）が挙げられている。発電力量を合計すると、右の記述と違い、四九万六三四九キワットとなる。内訳は火力二六万五三四〇（五三・五割）、水力二三万一〇〇九（四六・五割）である。右の五つの火力発電所とは、江別（五万キワット）、日本製鉄輪西（二万二三〇〇キワット）、清水沢（七万四五〇〇キワット）、砂川（五万キワット）、苫小牧工場（二万五〇〇〇キワット）を指している。水力発電で最大規模は、雨竜（五万一〇〇〇キワット）であり、千歳第一（二万キワット）がそれに次ぐ。千歳発電所は第一から第五まで全部で五基あったが、合計すると二万七九〇〇キワットとなる。

第九章の発電所の項では、千歳第一と江別の二枚の写真が掲載されている。北海道における電力の需要については、主に鉄鋼、炭鉱、軍需、製紙、パルプ産業であるとされ、一九三七年においては、炭鉱業が全体の三九割、製紙関連が二九割、電灯が七割の消費であったとされる。軍需産業を支えているという点で、発電所は空襲の標的にされ得る施設であった。

第十四章では、航空施設に関して、①「classified air facilities」（確証の高い航空施設）、②「reported air facilities」（報告を受けた航空施設）、③「possible location of air facilities」（航空施設のある可能性がある場所）と、情報の精度によって三種に分類して分析している。

①については、種類、座標、海拔、立地、規模、説明が記載されている。旭川・美幌・千歳・釧路・根室・帯広・大湊（二カ所）・札幌・稚内の一〇カ所が掲載されており、千歳については、次のように記載されている。

種類 MAD
座標 北緯四二度四八分 東経一四一度四〇分
海拔 七八フィート
立地 千歳および千歳川の南東一・五マイル、室蘭街道と鉄道の間、漁の南東

六・七五マイル、苫小牧の北約九マイル

規模 四五〇〇×一五〇〇（フィート）

X型滑走路

三九〇〇 北／南

三九〇〇 東北東／西南西

アスファルト、敷地の北西の角に無線塔、背の高い煙突、建物。北西と南東に伸びる誘導路が滑走路の端および格納庫・工場区域と接続する。収容力…通常時、中型爆撃機三六、緊急時同五〇。

説明 格納庫七、航空機工場に修理施設、ブラックおよび司令部。南西は室蘭街道、電動トロッキ用軌道、北東は鉄道に接続。無線施設が利用可能。千歳海軍航空隊の本部基地。全機種 of 航空機に対応すると報告されている。

種類の「MAD」とは、中型爆撃機用飛行場という意味であるが、種類については、次のように分類されていた。

HAD 重爆撃機用飛行場。六〇〇〇フィート以上の滑走路を備え、路面状況、高度、障害物などが重爆撃機の使用に適する。
MAD 中型爆撃機用飛行場。中型爆撃機に対応する約四五〇〇フィートの滑走路を備える。
FAD 戦闘機用飛行場。戦闘機の任務に対応する約三〇〇〇フィートの滑走路を備える。
HLG 重爆撃機着陸場。（以下、HADと同文）
MLG 中型爆撃機着陸場。（以下、MADと同文）
FLG 戦闘機着陸場。（以下、FADと同文）
SS 水上機用。
ASS 水上機用補助。

記載された一〇カ所のうち、HAD、HLG、ASSはなく、MADは千歳のみ、FADは大湊のみ、MLGは札幌・稚内、FLGは旭川・美幌・根室・帯広、SSは大湊のみ、ほかにELGとして釧路が挙げられている。すなわち、中型爆撃機用の千歳飛行場は、滑走路の規模、施設の充実度、収容力の点からみて最も重要な飛行場であったことがわかる。なお千歳には、さらに第二基地、第三基地があり、第二基地においては二五〇〇メートル（八二〇〇フィート）の陸上攻撃機・連山用の滑走路の建設が進められ、四五年八月十五日に完成する（HADに該当）。

なお②については種類、座標、海拔、立地、説明が記載されており、規模情報の有無が①と②の差であることがわかる。厚岸（着陸場）・広尾（着陸場）・深川（飛行場）・函館（着陸場）・岩見沢（着陸場）・釧路港（水上機用）・女満別（二カ所、着陸場と水上機用）・森（着陸場）・室蘭（二カ所、着陸場と水上機用）・長万部（着陸場）・小樽（飛行場）・礼文島（飛行場）・真竜（水上機用）・田名部（着陸場）・月寒（飛行場）・湧別（水上機用）の一八カ所が掲載されている。

また③については、種類と座標のみである。岩内（飛行場）・黒川（飛行場）・根室（水上機用）・根室第二（飛行場）・小樽（水上機用）・留萌町（水上機用）・苫小牧（飛行場）・洞爺（飛行場）の八カ所が挙げられている。

第十四章では、写真が全部で一三枚掲載されているが、そのうち千歳のものが四枚を占める。他に複数枚あるのは、美幌・釧路・帯広であるが、それぞれ二枚であり、千歳が最も多い。写真の枚数からは千歳飛行場に対する関心の高さが窺える。

前述の『航空情報摘要・本州北部および北海道』によると、以上の情報は改められている。北海道の飛行場として二五カ所がリストアップされ、

MADは浅茅野・千歳第一・帯広、FADは美幌のみ、MLGは稚内のみ、FLGは旭川・広尾・釧路・女満別・根室第一・根室第二・札幌・苫小牧、水上機用は厚岸・小樽・稚内、不詳は千歳第二・深川・岩見沢・計根別・室蘭・沼ノ端・小樽・敷生・八雲となっていた。このうち補給施設があるとされているのは、美幌・千歳第一・帯広・札幌の四カ所のみであった。四五年三月の時点では、千歳第二も分析対象になっていたことがわかる。千歳第一に関する記載について松本論文から引用したい。

北緯四二度四九分、東経一四一度三九分

千歳（ツマサ）及び千歳川の南東、一・五マイル。札幌と室蘭を結ぶ道路と鉄道の中間にあり、苫小牧の北方およそ九マイル。

規模 四五〇〇×一五〇〇フィートの長方形と報告されている。

滑走路 交差する二本があり、それぞれ、北西\南東に、長さ四六〇〇×幅二六〇フィート。北東/南西に、長さ四〇〇〇×幅二六〇フィートで、ともに、アスファルト舗装をしてある。

施設 工場、発電所、格納庫、通信所、官制事務所、兵舎がある（工場と兵舎は複数）。

重要性 千歳海軍航空隊の原駐地。

防備 建物のある地域の北西に、対空施設がある。

特記 この基地は、戦闘機及び爆撃機の作戦補給が可能で、燃料庫及び弾薬庫は、建物のある地域の真北にある。

付メモ付き写真及び見取図。

座標に関する記載が微妙に違うほか、滑走路に関しては、以前三九〇〇フィートが二本とされていたのが、四六〇〇フィートおよび四〇〇〇フィートに改められている。また対空施設のある位置が特定されている。

なお、米国立文書館は民間のウェブサイト「フットノート」

(www.footnote.com) と提携し、第二次大戦に関する史料を公開しているが、そのなかに米軍占領時に撮影された基地司令部庁舎、格納庫、診療所（共済病院）の三枚の写真がみつかるとは。

司令部庁舎（1945.9.24）



診療所（1945.9.24）



格納庫（1945.9.24）



(提供：Footnote.com)

USB・02 空襲目標情報…地域調査

本史料は、「雑多な参考資料」から構成されている。北海道に関しては、①旭川②苫小牧③室蘭④札幌⑤旭川⑥釧路⑦根室⑧函館⑨留萌⑩小樽⑪岩見沢⑫稚内⑬帯広に地域を区分して、軍事施設等の情報を掲載している。

千歳については②苫小牧のなかで記載されている。軍事の項では、海軍航空隊に関して、次のように述べられている。

1. 第四一海軍航空隊本隊が、十月三日、大湊より千歳に移駐し、任務を開始した。本隊、支隊、分工場の配置は以下の通りである。

第四一海軍航空隊 北海道千歳郡千歳町

第四一海軍航空隊美幌分工場 北海道網走郡美幌町

第四一海軍航空隊大湊支隊 青森県下北郡大湊町

第四一海軍航空隊大湊支隊三沢分工場 青森県上北郡三沢村

(二行略)

2. 第二〇魚雷調整班が北海道千歳郡の千歳基地へ移駐した。

また、造兵廠・補給隊については、次のように記載されている。

1. 千歳九（北緯四二・四八、東経一四一・四〇）

海軍航空隊（Cファイルに〇）

2. 第四一海軍航空隊、千歳補充工場、千歳郡千歳町（捕獲文書）

公共施設の項では、千歳川発電所に言及している。

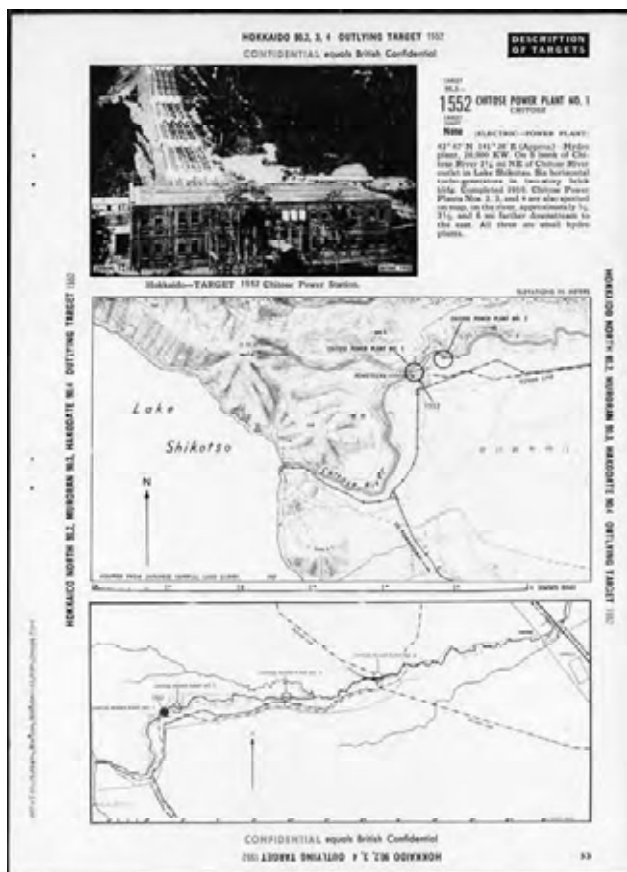
2. 千歳第一発電所（北緯四二・四七、東経一四一・二二六）

水力発電、2万KW。支笏湖の千歳川流出口の $1\frac{1}{4}$ マイル北東S字バンク上。二層の建物（レンガ）に6つの水平タービン発電機。一九一〇年完成。千歳第二、第三、第四発電所は、さらに下流の東へ、それぞれ約 $1\frac{1}{2}$ 、 $1\frac{1}{2}$ 、6マイルの地図上に示される。三つともすべて規模の小さい水力発電である（AOF 90・3、ターゲット1552、P. 53）。

AOFとは、AIR OBJECTIVE FOLDER（空襲目標情報）の略であり、詳しくは次項で述べる。

USB・11 空襲目標情報

行論上、USB・11を先に紹介する。AOFは戦地の作戦空軍部隊が使用するため、ワシントンの陸軍航空情報部の空軍主任幕僚部のJTG（米英両国により構成）によって作成された。対象地域ごとに番号が付されている。81・ボルネオから91・日本領太平洋諸島まで七つに区分され、90は日本本土を示す。その下にさらに細かく1・樺太から39・対馬までに区分された。北海道は、90・2北海道北部、90・3室蘭、90・4函館の三地域に区分された。



（提供：Footnote.com）

北海道の三地域はまとめて扱われている（一九四四年六月一日発行）。目標は全部で五〇、内訳はセメント工場一、通信施設一、発電所八、港湾施設および造船所一一、製鉄所二、被服工場二三、製油所九、製紙パルプ三、鉄道施設三であった。千歳は室蘭地域のなかで扱われ、目標番号一五五二―千歳第一発電所が解説、写真、地図を付して目標として掲載されている。解説の内容は、前項で述べたものと同じである。本史料に関しては「フットノート」において閲覧することができる。

なお飛行場に関しては目標の特別なカテゴリーに当たるとしつつも、その性格や重要性が変化しやすいため、目標のリストに含めなかったとしている。ただ参考として北海道の飛行場の一覧表が掲載されている。樺太の二カ所を含めた二八カ所の飛行場が掲載され、千歳については次のように記されている。

主要な軍用飛行場。海軍航空隊基地。重爆を含むすべての種類の航空機に対応する。千歳海軍航空隊の本拠地。規模四五〇×一五〇〇フィート。滑走路南北三九三六フィート、北東南西三九三六フィート。格納庫一、バラック、航空廠千歳支廠。

重爆に対応する飛行場であることが認識されているが、滑走路についての情報精度は低い。この情報は三カ月後、先にみた陸海軍合同地域調査（USB・01）によって更新されていた。

USB・10 各種日本関係情報

本史料は、「アメリカの日本および日本占領地域への空爆と、日本の軍事・経済・政治・社会・文化に関する公刊・未公刊の幅広い資料」からなっている。このなかに「JAPANESE AIRFIELDS」と題する文書が含まれおり、日本の飛行場の一覧表が掲載されている。表紙には、「ADVANCE

INTELLIGENCE CENTER CINCPAC] (上級情報センター 太平洋軍司令官) とある。

巻頭において、次のように説明が加えられている。

ここにおける記載は、空撮や捕獲文書および地図によって確かめられた、大日本帝国のすべての飛行場を含むものである。

この基本リストは、ほかのすべてのリストを更新するものであり、入手できる最新の情報である。校正・修正・改訂表がこの文書の所有者に定期的に発送されるであろう。

至急の重要な改訂を容易にするため、列ごとに記す。

ほとんどすべての日本の飛行場にAOF標的番号が付されている。残りが割り当てられたら、送信されるであろう。

航空機掩体は、六五フィートを下回る場合には戦闘機、六五フィートを超える場合には爆撃機に区分される。小格納庫は間口一〇〇フィート以下、大格納庫は一〇〇フィート以上である。二層の格納庫は、二つの格納庫、三層は三つ(以下同)と見做す。

詳細な機数が入手済ならば、以前の計測数を合同し、現在数と日付のみが示されよう。

I 列の戦闘情報が消去されているのなら、機密レベルに達していないのであろう。

追加や不備の改訂は、太平洋地域、高等情報センターよりもたらされる。

千歳飛行場については、一九四五年八月十五日の日付が付され、次のように記載されている。

A 名前

千歳

位置 (地図参照) 千歳の南東1マイル、早北の西北西7マイル

B 座標

北緯四二・四八 東経一四一・四〇

C 区分

MAD

D 規模・方位・舗装

敷地 五〇〇〇平方

滑走路

1. 三九五〇×二六〇 東／西

2. 四六〇〇×二六〇 北／南

舗装済

E 格納庫・工場数および位置

北西に大格納庫六、工場七

海軍航空隊に大格納庫三、工場一三

F 航空機掩体・駐機場の区分・位置

掩体 爆撃機用五、戦闘機用三七

駐機場一四

敷地の南および南西

G 機数

計測不能

海軍零式輸送機 二

H 写真ミッション実施日

3PR5M307 一九四五年六月二七日

3PR5M306 一九四五年六月二九日

I 注釈・戦闘情報

ターゲットNO. 2925 AOF 90. 3

四五年六月の空撮による情報をもとに更新したのであろう。格納庫や工場、掩体、駐機場の数が特定されている。また標的番号が付されていることから、千歳飛行場は確実に目標の一つとして捉えられていたことがわかる。

二 艦載機戦闘報告書と千歳空襲

以上、空襲目標として記載されていた千歳に関してみてきたが、では実際の千歳空襲はどのようなものであったのだろうか。千歳空襲に関しては、以下のような日本側の記録・証言が残っている。

千歳を知る会会長・榊原武雄は、「千歳に何回飛来したのかはわからないが、私は二回覚えていいる。最初は天気の良い日に一機、千歳上空で向きを変え飛び去って行った。もう一度は深い曇りの日で、三十機とも六十機とも言われる大編隊で、大きな爆音を響かせ通り過ぎて行った」と回想している。

また藤井貞雄『千歳特攻隊始末記』は、「数機の米艦載機が千歳基地を低空で襲ったが、機銃掃射で威嚇するだけで、爆撃することもなく、千歳基地の手の内を見抜いたような、余裕たつぷりの飛行ぶりであった」としている。

一方、学徒出陣で予備学生として海軍に入隊し、千歳基地に着任していた武藤誠『いくさ世の回想』⁽⁹⁾では、受ける印象が少し違う。武藤によると、十五日、米軍機は「千歳基地への威力偵察を兼ねた、空中からの攻撃を仕掛ける作戦でやって来た」。午前九時ごろ、基地近くの電波探知機隊が南方海上に航空機の機影を認め、各員が配置に就くなか、三十数機が来襲した。グラマンF6F戦闘機であり、二編隊のうちの一隊約一〇機が本部建物に向かって接近し、ロケット弾を発射する直前、高射砲の反撃を受けたため

回避し、そのまま飛び去ったという。武藤は、「あの時、下からの射撃が、ほんの一秒くらい遅れていたら、あそこで部下と共に吹き飛ばされていたことであろうと思った」と述べている。武藤にとっては絶体絶命の危機であったが、艦載機はすぐに飛び去っており、何としても破壊するという飛行場に対する米軍の強い攻撃意思は感じられない。

また『千歳市史』(七六二頁)は、千歳警察署の『沿革史』を引用して、「四機編隊千歳上空に向はんと南側に顔を見せ、砲台よりの一発に白煙ほつと機銃真々地沢炭焼かまどに爆発して飛去せるのみ」と述べている。

榊原証言の「最初は天気の良い日に一機」というのは、先の「JAPANESE AIRFIELDS」が言う写真ミッション実施日、四五年六月二七日あるいは二九日のことを指すのではないだろうか。「もう一度は深い曇りの日」というのは、七月十五日であろう。七月十五日には、武藤が詳細に述べているように「約一〇機」のグラマンF6Fが千歳基地を襲おうとしたが、反撃を受けたため回避し、飛び去った。千歳警察署『沿革史』がいう「四機編隊」とは、千歳基地に飛来した「約一〇機」のグラマンF6Fとは別のものだろうか、「真々地沢」の炭焼かまどを機銃掃射して飛び去っている。

ではこの千歳空襲を米軍文書で裏づけることができるか。北海道空襲に関しては、「海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書」(USB-06)により、北海道を空襲した第三八任務部隊の空母ごとの戦闘の様子が判明する。

第三八任務部隊は、J・S・マッケイン中将を指揮官とし、四五年六月、九州南部の飛行場攻撃に従事した後、レイテ島で補給・休養を行い、七月、再び日本本土へ向い、太平洋を北上し北海道襟裳岬沖約一五〇*に迫った同部隊の陣容および攻撃目標は表2のとおりである。第三八・三任務群は本州東北地域を目標としていたので、艦載機が千歳に飛来するとならば、第三八・一任務群、もしくは第三八・四任務群所属の空母艦載機であると

表-2 第三八任務部隊

	空母名	攻撃目標
第三八・一任務群	ベニントン(旗艦) レキシントン ハンコック ペロウウッド サンジャシント	釧路 根室 厚岸 (石狩) (恵山) 根室 根室 帯広 (本別) 美幌 根室 計根別 池田 日高 (石狩) 札幌 小樽 旭川 留萌 富良野 (雄冬) (白糠) 根室 釧路 根室 (白糠) 帯広 (本別) (広尾) 日高
第三八・三任務群	ランドルフ(旗艦) エセックス ティコンデロガ モンテレイ パタアン	八戸 三沢 大湊 青森 小湊 函館 津軽海峡 松島 三沢 青森 (志津川湾) 津軽海峡 欠 青森 三沢 (三厩) (船川) (八幡) 津軽海峡 青森 八戸 函館 八郎潟 横手 (大間崎) (尻矢崎) 津軽海峡
第三八・四任務群	ヨークタウン(旗艦) シャングリラ ボンノムリチャード インデペンデンス カウペンス	室蘭 函館 日高 苫小牧 滝川 岩見沢 小樽 室蘭 八雲 (森) 島松 (石狩) 函館 欠 函館 浦河 (襟裳岬) 室蘭 (鹿部) (広尾)

(注1) 松本尚志「アメリカ海軍資料に見る北海道空襲(1)」『トカプチ』14、2002.3、82～83頁より作成。

(注2) 攻撃目標中の括弧内は、臨機目標。

考えられる。千歳に近い地域を攻撃目標としているのは、ベニントン、ハンコック、ヨークタウン、シャングリラであった。

第三八・一任務群の各空母戦闘報告書に関しては、すでに松本氏によって訳出がなされており、空襲の詳細が判明する。七月十五日午後十二時四十分(1)にハンコックから出撃したVF(戦闘機)六機、VBF(戦闘爆撃機)八機、VB(爆撃機)一〇機、VT(攻撃機)一二機が小樽湾や石狩湾で貨物船を撃沈し、軽川(現札幌市手稲区)で精油施設に損害を与えている。また同日午後一時三十分(2)にベニントンから出撃したVBF八機、VB四機、VT一五機が、石狩および江別の発電所などを爆撃している。

これらの艦載機の攻撃ルート上に千歳があり、一部が千歳に立ち寄ったとしてもおかしくはないが、千歳での戦闘記録は出てこない。武藤の回想と比較すれば、ハンコックの艦載機の方は三十数機が飛来し、そのうちの約一〇機が飛行場を狙ったものとはほぼ符合するが、飛来時刻が合わない。

い。ベニントンの方はグラマンF6F(VF)がないことと飛来時刻が合わない。あるいは、武藤の回想にある時刻が誤りなのだろうか。

では、第三八・四任務群の戦闘報告書はどうであろうか。旗艦ヨークタウンの戦闘報告書(3)においては、「Aerial Photography」(空撮)について次のように述べられている。

1. During the period from 2 July to 15 August, twelve successful photographic missions, each consisting of two VF(P) and two VF escorts were flown.

すなわち、撮影ミッションは七月二日から八月十五日まで、一二回成功したとされているが、隊の編成は、VF(P)とそれを護衛するVFの計四機であったという。VF(グラマンF6F・5)は、兵装は一二・七ミリ六門または一二・七ミリ四門と二〇ミリ二門、さらに通常爆弾(五〇〇ポンド)二発またはロケット弾(五インチ)六発を装備できた。VF(P)は、その写真偵察型であり、カメラを装備していた。この撮影ミッションが七月十五日、沼ノ端および苫小牧飛行場、苫小牧の工場で実施されたところがあるが、千歳で実施されたかどうかは確定できない。第三八・四任務群全体の報告書に掲載された空撮写真のなかにも千歳のものは見つからない。兵装はロケット弾を発射しようとしたとする武藤の回想と合うのだが、機数は合わない。一方、千歳警察署『沿革史』と機数は一致する。しかしこれも確定的な証拠はない。

またシャングリラの戦闘報告書には、次の記述がある。

Launch Time 1045

Aircraft 4VBF

Mission Sweep B-2

Remarks

Two locomotives were destroyed at Shimamatsu. A large factory building was set afire at Mosenshi.

これによると、十五日、十時四十五分に発艦した四機の戦闘爆撃機（VB F）が島松で列車を攻撃している。^(w)同機が千歳に飛来したかどうかについては不明であり、武藤の回想とは機種、機数、時刻の点で異なる。一方、これも千歳警察署『沿革史』と機数は一致するが、確定的な証拠はない。結局、ヨークタウン、シヤングリラの戦闘報告書においても千歳に飛来したとする記述は発見できなかった。^(x)

日本側の記録にあるように千歳に飛来したのは間違いない。しかし、米空母の戦闘報告書には記述を見つけることはできなかった。もともとあった記述から千歳の記録だけを削除したとは、通常考えられない。とすると、千歳を直接の目標としない艦載機が、途中で千歳に立ち寄ったが、それは記録するまでもないと判断されたと考えるのが、妥当かもしれない。

他の飛行場、例えば西春別では格納庫、補給地区、機関車、標津では格納庫、計根別ではトラック、倉庫、機関車、帯広では航空機修理施設を破壊されている。^(y)また、先述のように石狩や江別の発電所は攻撃を受けている。ではなぜ、道内でも有数の千歳飛行場や千歳川発電所が本格的な空襲を受けなかったのか。基本的に、米軍は制空権・制海権を掌握しており、戦況がほぼ決しているなか、生殺与奪は米軍の意のままにあった。飛行場への攻撃に関しては、すでに『千歳市史』（一九六九年）が指摘しているように、「米軍が千歳飛行場を無傷にしておいたのは、進駐するときに飛行場として使用するためであった」（七六二頁）とする説が妥当と考えられる。飛行場の保存方針に伴い、同じく千歳にある発電所の攻撃も回避されたのだろうか。進駐した米軍は実際、千歳飛行場を米空軍戦闘機部隊に使用し、敷地を拡張、滑走路を延長していった。^(z)

おわりに

以上、空襲目標としての千歳についてみてきたが、米軍が目標としていたのは、飛行場と発電所であった。特に飛行場に関しては詳細な記述がなされ、また多くの写真が収集されており、関心の高さが窺える。

飛行場に関する情報は時系列に並べると、

USB・11 空襲目標情報（一九四四年六月一日）

USB・01 空襲目標情報…陸海軍合同地域調査（同年九月）

『航空情報摘要・本州北部および北海道』（一九四五年三月十五日）

USB・10 各種日本関係情報所収「JAPANESE AIRFIELDS」（同年八月

十五日）

と、更新されていったものと考えられる。

実際、千歳飛行場に米軍艦載機が飛来したが、大きな被害（米軍側から言えば戦果）がなく、記録するまでもないと判断されたためか、艦載機戦闘報告書においては千歳に関する記述は見当たらなかった。また発電所も被害がなかった。千歳に飛来した艦載機がどの空母のものなのかという点は、依然、課題として残った。

なお北海道における自治体史の観点からみても、今回紹介した米軍文書は有用であると思われる。軍事に関しては機密であったり、史料が焼却されているなかで、米軍側の史料によって補完できる可能性があるだろう。また軍事だけでなく、例えば「八一 北日本 北海道」（USB・01）においては、産業や文化、衛生、政治状況など北海道を総合的に分析しており、それらは戦争末期の北海道に関して参考になるであろう。「フットノート」についても写真だけでなく、多くの文書が公開されており、調査を続ける必要があるだろう。

註

- (1) 松本尚志「アメリカ海軍資料に見る北海道空襲(1)」『トカプチ』一四、二〇〇二年三月(以下、「空襲(1)」)、七四〜七五頁。
- (2) 「北海道空襲図」、菊地慶二『語りつぐ北海道空襲』北海道新聞社、二〇〇七年。
- (3) 本稿執筆に当って、守屋憲治氏から有益な御教示を賜った。記して感謝申し上げる。
- (4) 「空襲(1)」および同「アメリカ海軍資料に見る北海道空襲(2)」『トカプチ』一六、二〇〇四年(以下、「空襲(2)」)。七月また室蘭地方史研究会編『室蘭戦災誌』(一九八三年)や釧路戦災記録会『改訂版』『釧路空襲』(一九八八年)、網走空襲の記録編集委員会編『網走空襲の記録』(一九九〇年)においてとりあげられている。
- (5) 「空襲(1)」。憲政資料室所蔵『米国戦略爆撃調査団文書』を調査したが、その所在を確認できなかった。
- (6) 憲政資料室所蔵『米国戦略爆撃調査団文書解説目録』日本語訳一五頁。
- (7) 王子製紙『王子製紙社史 本編』二〇〇一年、四六頁によると、第一から第五までの発電量の合計は、二万八六五〇キワットとなっている。
- (8) 「飛行場」は舗装された滑走路と十分な施設を有するのに対し、「着陸場」は全天候型の滑走路ではなく、施設面でも劣るとされている。
- (9) ELGの説明はないが、緊急着陸場という意味だろうか。
- (10) 旭川(通常時戦闘機二二、緊急時同二四、以下同)、美幌(爆撃機二四、四八)、釧路(戦闘機二四、三六)、根室(戦闘機二四、四八)、札幌(戦闘機二二、二四)。
- (11) 海軍は、重爆撃機を陸上攻撃機と称した。内田丈一郎『海軍辞典』一九四

四年、二九七頁。

- (12) 木古内のすぐ南西にあるとする一方で、新飛行場はより函館市に近いところに位置するであろうとも述べている。
- (13) 同じ内浦湾岸の八雲と誤認か。
- (14) 着陸場と報告されているとする一方で、湾の南側に水上機の着水エリアがあると報告を受けたとも述べている。
- (15) 座標は北緯四三度〇三分・東経一四四度・五一分とあり、厚岸湖を示す。
- (16) 北海道ではなく、下北半島にある。本州にあることが認識されているが、あえて北海道に含められている。
- (17) この情報は特に確証が低いものと認識されているようで、“approx” “not located” “Unconfirmed”の文言がみえる。
- (18) 水上機の停泊地であり、サロマ湖内にあるとされている。
- (19) 座標は北緯四三度〇九分・東経一四〇度四九分とあり、余市を示す。
- (20) キャプションにはそれぞれ、
Administration Building, Radio And Weather Control At Chitose Naval
Airstrip, Japan.
Japanese Hangar At Chitose Airstrip, Japan.
Health Center Building At Chitose Naval Airbase, Japan.
とある。
- (21) 王子製紙は発電所および製紙パルプ工場の二つに重複して記載されている。
- (22) 『米国戦略爆撃調査団文書解説目録』一二頁。
- (23) R 37。
- (24) 前掲『語りつぐ北海道空襲』一四八頁。
- (25) 北海道新聞社出版局、昭和五十九年、一三七頁。著者は特攻隊員として千歳基地に在隊していた。

- (26) 非売品、二〇〇三年、八二―八七頁。
- (27) 前掲『網走空襲の記録』および「空襲(2)」。
- (28) 機種は VF はグラマン F6F 5、VBF はヴォート F4U 1D ある
いはグッドイヤー FG 1D、VB はカーチス SB2C 4 および 4E、VT
はグラマン TB M 3 および 3E であつた。ここには登場していないが、VF
(P) はグラマン F6F 5P である(松本 前掲論文、八四頁)。なお本史
料に言う「VF」等が飛行編隊数ではなく、機数を示していることは、例えば
ヨークタウン戦闘報告書の次の記述から判明する(USB 6、R 29、第八四
四「マ」)。
During the day, landed two replacement planes (one VF and one VF).
- (29) 榊原証言は、まさに千歳上空を通過する艦載機を示しているのではないだ
ろうか。
- (30) USB 6、R 29、第九「ニコマ」。
- (31) 「空襲(1)」八四頁、釧路戦災記録会『釧路空襲』改訂版、一九八八年、
五七頁。
- (32) USB 6、R 26、第二「ニコマ」F4U 1 の兵装は、一二・七ミリ六門、
通常爆弾(五〇〇ポンド)二発またはロケット弾八発であつた。「空襲(1)」
五七頁。
- (33) 松本氏も「千歳飛行場については、不思議なことに、膨大な戦闘報告のな
かに、目標としても、攻撃地点としても、何故かその名は見当らない」として
いる。「空襲(1)」八九頁。
- (34) 前掲『釧路空襲』七四頁。
- (35) 『増補千歳市史』一九八三年、一〇六六頁。